パラドクサー

yananim

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラドクサー

【Ｎコード】
Ｎ３６５６Ｚ

【作者名】
ｙａｎａｎｉｍ

【あらすじ】
地球が地球を襲うという不可思議な報道が漂う最中、一瞬で数台の車が潰され、群集の前一瞬で女性が惨殺される事件が起こる。すべてがコンマ数秒での出来事だった。そんな事件に大学教授の相馬誠二が興味を抱いた。

?プロローグ～噂～

人の噂も七十五日。芸能界での麻薬汚染の噂、いぶし銀の渋さで名を売る有名俳優の同性愛疑惑、大物セレブ女優の高級コールガールの噂、どれもこれも確証がないままに時が経ち、そのネタ自体が死んでいく。噂というものは所詮はそんなものだ。

念願だったニュースキャスターのアシスタントになり1年が経とうとしている大塚みどりはニュース原稿の読み合わせを途中で中断した。

「どうした？まさかわからない字があるわけではないだろう」

キャスターの柴本哲夫は隣でみどりの原稿を覗いた。打ち合わせとはいえ、普段めったに言葉を噛むことがないみどりの態度に不信感を持ったようだ。局アナを定年退職をしてフリーになっても実年齢より若く見える柴本も、ハゲ上がった額に年季の入った深い皺を漂わせると年相応の老け込みは隠せない。

「この噂って、ニュースで読むようなことでしょうか」

みどりは心の中に引っかかっている何かを確かめるように柴本に率直にぶつけてみた。一年前、みどりが柴本のアシスタントキャスターとして決定をしてわざわざ柴本が所属する事務所まで足を運んだ初めて挨拶をしに行った時だった。

「キャスターもニュースネタに疑問を挟むことは良いことだよ。原稿に書かれた事実だけを読むだけなら新人局アナにも出来るからね。疑問に思ったら黙っていないで、堂々と口に出してみることだ」

ベテランの厳しさというよりも優しさを前面に出した柴本のこの言葉に、みどりは救われた思いでいた。そしてその言葉を糧にして、1年間柴本のサポートをしてきたつもりだ。しかし、今回の原稿の内容はあまりにも滑稽な内容だった。

「世界中の有名な霊能力者の発言なんてニュースの素材としてどうなんでしょうか」

「続き読んでみなよ。日本ではそれほど騒がれていないけど全米を初めとして世界各国でパニックになろうとしているんだ」
柴本は冗談かと思うほどに真剣な目で原稿を見つめながら呟くように言った。
しかたなく続きを読み始めたみどりの脳裏に別な記憶がシンクロをしてきた。
「・・・・世界中で名を馳せる7人の有名な霊能力者と呼ばれる人々が同じ予言をして世界中を混乱させています。7人の各霊能力者たちは共通して＜あの世とこの世が重なり合う＞と発言していることでそれを信じる人々がパニック状態になり世界各地で暴動が多発しているということです」
この原稿は世界で起こる暴動がテーマの中心なのだろう。それなのにどうして霊能者の発言に主眼を置くような書き方なのか、みどりにはわからなかった。霊能者たちを糾弾しようとする動きがあるわけでもない。あくまでも霊能者の発言がメインになっている。その一方でみどりは別のニュースを思い出していた。しかし、その記事は今日の番組内容には予定されていない。
「あの・・・・。」
みどりの言葉の続きを辛抱強く待つような、柴本のみどりを見る目は1年前と変わってはいなかった。
「つい先日、ＮＡＳＡでもうひとつの地球のような惑星が地球に近づきつつあるという噂がありましたが、それとこれって関係は・・・・」
「あれこそただの噂だし、ＮＡＳＡはそんな情報を流した覚えはないと公言してるしね。あれとこれを勝手に関係づける方がキャスターとしては変じゃないのかな」
確かにそうなのかもしれない。しかし、みどりの中で何かが引っかかっていることを否定することは自分の心が許さないような気がしていた。
「ＮＡＳＡが確認のためにもうひとつの地球に衛星で近づいたら忽

然と消えたとか、隕石がその星がまるで無かったように通過してしまったとか、あり得ない話だよ。きっと、何か目の錯覚で星に見えたんだろう。何しろ宇宙は暗いからね」
と言いながら柴本は快活に笑った。
大塚みどりはその後は単調に読み合わせを続けた。

東京郊外にある大手のスーパーマーケットは、建設当時近隣住民の反対の声を多数受けながら工事に着工をして営業が始まった曰く付きの大型店舗だ。
車が何百台入るのかわからないほどの大きな駐車場の一画に、数台の警察車輌を止めた警察官が人垣をかきわけて「もっと後ろに下がって！」と叫び続けていた。
同じ地面にいたのでは何が起きているのかわからない。自分の１９０センチに近い長身を活かしてもなかなか目的のものがわからない、とスーパーの２階へ駆け上がった相馬誠二はポロシャツの襟を手でバタバタさせて荒い息を吐いた。最近は研究室に閉じこもることが多いせいか妙に体力が落ちている。そんな後悔もその窓からデジタルカメラをズームアップさせると消し飛ぶように衝撃を受けた。
「何だこりゃ」
一言呟いた誠二のデジカメの画面には駐車スペースの一列のうち４台分に潰された鉄板のようなものが４つ並べたように置かれていた。
誠二がじっとその画面を見つめるうちに、それが上から踏まれたように潰された４台の車だということがかろうじて見て取れた。あり得ない光景だった。駐車場の上から何かが落ちてくるような物の何もない開かれたスペース。そして、４台の車を潰すほどに落下をした物体も近くには見当たらなかった。
象でも踏んで行ったか。いや、象どころではない。恐竜でも現れない限り現実に起こりえないだろう。
これ以上ここにいても何も情報がないと思った誠二は、恋人を待

たせている地下食品売り場に戻ろうと踵を返そうとした時だった。
「でもさ、一瞬のことで何が起こったのかわからなかったもんな」
そう言ったのは、誠二の隣で同じ人垣の中を見物していたカップルのアゴひげを生やした今時の若い男だった。相手の女も不思議そうな顔をして何かを思い出そうとしている。
「だってさ、わたしたちあの車の前にいたのに何の音もしなかったんだよ。それまでは普通に車があって・・・・」
「コンマ数秒だよな」
「コンマ数秒？」誠二はその言葉に思わず見ず知らずのカップルに聞き返してしまったが、若い男は人見知りをしない性格なのか、当然のように話始めた。
「そう、コンマ数秒。歩いてるときに横に普通に車があって、歩いているんだから進行方向に正面を一瞬でも見るじゃないですか。それでまた何気なく横を振り向いたらあの状態になっていて、それがコンマ数秒」
「まさか・・・。」
誠二の呟きに二人の若い男女は困惑の様子を示した。
「やっぱり信じてもらえないですよね。俺たちもわけわからないから余計に怖くなって走ってここに逃げて来たんだもんな」
来たんだもんな、と言われた女が「うん」と肯いた。
二人の様子を呆気に取られて見ていると、聞きなれた音楽がどこからか聞こえて来た。
ーＴａｋｅ　ＦｉｖｅのＤａｖｅ　Ｂｒｕｂｅｃｋ．。ジャズ好きの誠二とジャズに興味がない彼女の唯一の共通する好きな楽曲だ。誠二は慌ててジーンズのポケットから携帯電話を取り出した。
受話器を耳に当てるなり、すぐに怒ったような若い女の声が怒鳴るのが聞こえた。
「いったいいつまで待たせるつもり？」
顔は見えなくても本気で怒っている声かどうか、付き合いの長い誠二にはその可愛らしく頬を膨らませた顔が思い浮かんだ。まだま

だ彼女は怒っていないようだった。だが、これが限界だろう。
「すぐに行く」と電話を「切り、まだ困惑をしたままのカップルに「ありがとう。君たちの話を信じるよ」と声をかけてエレベーターへ走った。
信じると言われた若いカップルはその言葉が信じられないように、あ然として誠二の後姿を見送った。

地下食品売り場でカートを押している本間玲子は、隣で「俺が押そうか」と手を伸ばす誠二の手を軽く振り払った。女を怒らせてしまった男の哀れさが今の誠二には感じられる。それが案外可愛いと玲子は思った。もしかすると自分って結構Mな方なのかもしれない。
それでも本当はほとんど怒ってなんかいない。この辺で雰囲気を変えようと思い、玲子は「外の騒ぎは結局何だったの」と訊ねてみた。
誠二はさも得意そうに笑い、デジカメを取り出した。さっき撮影したデータを探しているようだ。
「見たいか？」
誠二はさも得意そうに聞いてくる。先ほどまでの女を待たせて怒らせた哀れさは微塵も消えうせていた。こんなことならもう少し怒ったふりをしていればよかったかもしれない。
野菜売り場で色とりどりのピーマンを手にして検討している玲子の前に、誠二がデジカメの画面を差し出した。
一瞬見ただけでは一体何の画像なのかわからない。
「これ、何？」
「車が潰されていたんだ。それも４台」
「ビスケットみたいにペチャンコじゃないの」
さほど驚くようでもない彼女の反応に、誠二はまたもっと驚かせたい衝動に駆られた。
「しかも、数コンマ数秒だぞ。どうだ、驚いただろう！」
人参を手にとりカートの中に入れていた玲子の横で、一人テンシ

ョンを上げていることに気づいた誠二は「今夜はカレーか」とポツリと言った。
「違うわよ。今夜は久しぶりに二人ともお泊り出来るからステーキでも食べようかなと思ってるいるんだけど、反対？」
「ステーキか・・・・まあ、良いだろう」
　そう言いながらも、クールを装った誠二が心底嬉しそうなことは玲子にもわかった。
「でもさ、誠二さんの学会・・・・光と・・・・何とかの・・・・」
「光と時空の科学学会だ」
「案外暇なのね。そんな写真を撮って喜んでいるんだから」
「光と時空の科学学会はな、ほとんどお遊びで良いんだ」
「変なの」
「元々はうちの学会はアメリカで光学博士のモーリス教授が光を利用したタイムトラベルの理論から始まっているんだ」
「それは前に聞いた。光で空間を捻じ曲げて時空を歪めるっていうアレでしょう」
「そう。その理論に同調した日本の7人の教授でこの学会を作った。この際我々はタイムトラベルについてはモーリス教授に任せる意味を込めて、タイムトラベル以外のことを研究しようということになったのさ。光と時間と空間の関係をいろいろな角度から研究をして、どのような現象を起こすことが出来るのかとか、テーマは一人一人に任せている。だから遊び心が無ければこの研究は先行かないんだよ」
「それで誠二さんはどんなテーマを研究しているわけ？」
「それはまだ内緒だ。学会仲間もテーマのこととなれば、発表するまで敵だからな」
「発表して自慢し合うまででしょう」
　玲子はからかうように言ったのだが、誠二はそんなことは意に介さないタイプだ。
研究のことになると話が次から次へと玲子の知識力と心を無視して

進んでいく。それがいつもの二人の習慣のようなものだった。
「それで、おもしろいものが手に入ってね。知り合いの記者からコピーをもらったんだ」
そう言いながら、誠二はまたショルダーバッグの中をまさぐり始めた。
科学の世界では光の研究家として玲子が思っている以上に、相馬誠二という大学教授は有名であることを最近の雑誌で知ってはいた。そこに書かれている”若き天才”という文字も得意げな誠二の微笑の前で躍っているかのようだった。
ここのところ何を思いついたのか、研究室に籠もりきりだった誠二にようやく連絡を取れたのはつい昨晩のことだった。
「やっと研究の段取りがひと段落したから」と誠二の方から玲子に電話をしてきたのだ。いろいろな男の身勝手さには今まで散々振り回され嫌な思いもしてきたが、誠二の身勝手さは不思議に腹が立たなかった。
玲子は肉売り場でメインのステーキ料理の肉を見回していた。
一国産ステーキ用牛肉　一〇五〇円。それを2枚手に取りカートに入れた時、今度は一枚の写真が玲子の顔の前に突き出された。
今度の誠二のサプライズ写真にはさすがの玲子も血の気が引いた。
「これ・・・何？」
写真は一見するならボロ布ようだが、誰が見てもボロ雑巾のようになった人間の姿だった。髪の長さからすると女だと思われた。
「新宿南口改札前の朝の写真さ。この女性は新宿のオフィスビルで営業事務をしているＯＬなんだが、この朝は同じ職場の先輩でもある彼氏と一緒に新宿駅に降り立った。何しろ朝の新宿だ。人の数は半端じゃない。人がこれだけボロ雑巾のようになるには普通ならどれくらいの時間を要すると思う？」
見るに耐えない写真だけでなく、誠二の質問も聞くに堪えない。人がその姿になるまでの過程を想像をしただけでも体の芯が震えてくる。それでも声を振り絞って玲子は思いつくままを口にした。

「最低でも・・・・十分くらい？」
「三十分だ。これを見た限りではかなり抵抗をしている。服がこれだけボロボロなるには逃げて捕まれ破られないとこうはならない。そして全身には何十箇所の深い爪あとのような切り傷があった」
「それじゃあ、その三十分間、その女の人がやられているのを誰も止めなかったの？誰も見て見ぬふりだったの？」
「正確に言うと、見れなかったのさ」
誠二の言っている意味がまったくわからない。普通ならば知識の差があっても、それを埋める何かの以心伝心のようなものがあって不自由さを感じたことはなかった。しかし、今日の誠二は何かがいつもと違う。このままこの流れが続くならば、誠二がどこか見知らぬ遠い場所へ行ってしまうような気がしていた。
しかし、その流れは止まりそうも無いことが誠二の熱い口調でわかった。
「彼女と彼氏は普通に何事も無かったように電車を降りて、普通に改札を出た。彼氏の方が少し遅れて改札を通過した。先に出た彼女は当然のように彼を待っていた。彼氏が改札を出ると一瞬彼女が消えたような気がして周囲を見回した。そして、周囲からざわめきと悲鳴が聞こえたんだ。彼の足元には彼女がこの状態で転がっていた」
警察がその後駆けつけたが、目撃者は大勢いたと同時に目撃者は誰一人いないという異常な事態となっていた。多くの目撃者は彼女は確かに元気に普通にそこに立っていたというものがすべてであり、倒れる瞬間も傷だらけになる過程も誰も見ていなかった。当然彼氏にも嫌疑はかけられたが、彼氏も周囲とまったく同じ証言しか出来ずにいた。
警察の科学捜査でもこれだけの遺体を作るにはある程度の時間を要することが証明されている。彼女をどこかで殺して新宿駅の前に遺棄されたような気配も一切無かった。ましてやそこで惨殺されてまったく動かされていないという証明の方が強く出されたくらいだというのが警察の見解だった。

「何かのトリックじゃないの？」と玲子は恐る恐る言った。
「もちろん、何かトリックがなければこんなことは起き得ない。そのトリックはいったい何なのか。マジックか・・・・それとも・・・・。まあ、トリックであったとしても恐らく一流のマジシャンでもわからないほどの超科学的なトリックだろう」
「それじゃあ、さっきのデジカメの車も？」
「コンマ数秒だ！」
誠二の口角の両側が上がった。またテンションが上がっている。
誠二がまだしまわずにいる惨殺死体の写真がまた目に入ってしまった玲子は、カートに入れた国産牛肉の一パックを元の売り場ケースへ戻した。

虹色の戦士（前書き）

突如現れた闇夜の怪物に襲われたＯＬ。それを救ったのは虹色に輝く怪物だった。果たしてそれは敵なのか味方なのか。

虹色の戦士

何が起きているのかわからない。空虚な夜の街を、風間由美子はひたすら走っていた。大都会の夜である。ネオンがまたたき、真昼のような明るさが大きな交差点を照らし出している。賑わう雑踏。人が夜というのに溢れんばかりに交差して歩く。それが現実なのだ。それが普通なのだ。しかし、街の明るさはいつもとは変わらないにも関わらず、人の姿は欠片も見当たらない。ただひとつ今、由美子を追いかけているもの以外は。いや、その襲撃者が人間なのか、由美子は自信を持てなかった。　襲撃者の黒い皮膚は異常に厚そうだった。頭からは二本、突起が出ている。目は二本のただの線にすぎないのか、瞳らしいものが見えなかった。そして、裂けたような口からは鋭い牙が剥き出しになっていた。　そんな化け物が走り迫って来る。その足音は、まるでマンモスでも走っているかのような大きな地響きだった。

とにかく怖い！とにかく逃げたい！そんな単純な理由でしかなかった。

由美子はひたすら走った。

どうして、こんなめに遭っているのだろうか・・・・考えてもわからない。ただ、由美子は先ほどまで、この街を同僚と一緒に歩いていた。大学を出て数年間、週刊編集局で男勝りの取材力で仕事に打ち込んで来た。そしてあるスクープを打ち上げ売上部数が倍増となり、鬼の編集長の計らいで編集部で飲み会を設けられた。その夜、数人の仲間と共に集合場所の居酒屋に向かう途中、事件は起きたのだ。

さっきまで手にしていたバッグがない。突然現れ、突然自分をめ

がけて走って来た化け物にとっさに投げつけてしまったからだ。子供の頃から物は大切にしてきたほうだった。小学生の頃に母からもらった小さなお守り袋は今でも手放さない。しかし、それもまた投げつけたバッグの中に入っている。現在の仕事についてもスクープのためならば命も惜しいと思わなかった。それなのに、今はひたすら逃げている。命が惜しい。それが本音なのだ、自分は弱い人間なのかもしれない。由美子の頬を伝った涙が風に切れていくのがわかった。

由美子は、ビルとビルの狭い空間に入った。一瞬化け物の姿が見えなくなった。もしかすると逃げ切れるかもしれない。路地裏のためか、暗い中でゴミ箱を蹴飛ばしてしまった。散乱したゴミを踏んで走った。生ゴミなのか、異臭が漂ったが、その現実感が由美子の唯一の味方のような気がした。

路地裏の曲がり角を幾度か回り込み再び目の前に大きな道路が見えたその時、由美子は再び硬直した。化け物は由美子を放っておいてはくれなかったのだ。

来た道を引き返そうとした時、足がもつれた。その刹那、化け物の手が由美子の腕をつかんだ。必死に抵抗をする由美子の腕を化け物の手が上へ引き上げる。恐ろしいほどの握力だ。骨がきしむような気がする。もしかするとこのまま、骨折するかもしれない。由美子の額から脂汗が滴り落ちた。このまま気が遠くなり失神をしてしまった方が、最期の時は楽かもしれない。化け物は由美子の腕を放すこともなく、もう片方の腕を上げた。その指にはナイフのような鋭い爪が光っている。

化け物の手が高々と上がった瞬間、堪えきれなくなった由美子は目を瞑った。

「ギャー！」

化け物が激しい声を上げた。その瞬間、しっかりとつかんでいた由美子の腕が解放された。目を開けた由美子の瞳には、奇妙な光景が映っていた。

化け物の背中が光っている。いや、燃えていると言うべきかもしれない。
少なくとも化け物は、苦しんでいるようだった。
化け物は、その背後を振り返った。
暗闇に虹色の人型が徐々に近づいて来ている。
由美子も化け物の背後に静かに歩いてくる何者かを見た。
その体は虹色に輝いているようだった。虹色の包帯を頭の先からつま先まで巻いているようにも見える。しかし、その包帯に見えたものはすべてが皮膚のようだ。
唯一、瞳だけは激しい光を放っていたが、確かに人間のものだった。
まるで虹色の忍者だ・・・。由美子はそう思った。
そんな由美子の考えを余所に、虹色の忍者は逆襲する化け物と格闘を始めた。
格闘というほどのものではない。虹色の忍者の一方的なパンチや蹴りが炸裂して化け物はダウン寸前なのだ。それでも反撃しようと抵抗する化け物に、最後のとどめとばかりに、忍者が構えた。激しく踏み込んだ忍者の蹴りが化け物を吹き飛ばした。化け物は体を激しくアスファルトに叩きつけられた瞬間に爆発をして砕け散った。
終わったと思って良いのだろうか。この忍者は敵なのかもしれない。もしかすると、ただの獲物の取り合いだったのかもしれない。しかし、緊張が解けない由美子に背を向けて虹色の忍者は夜の闇に消えて行った。
そして、誰かに名を呼ばれた。振り返ると、そこには見知った同僚がいた。街の景色はすべて何事もなかったようにもとの姿に戻っていた。

「あ、いたいた・・・。風間さん、一瞬消えたかと思った」
後輩の増田潔が由美子を探してキョロキョロしていたようだ。
「信号変わりましたよ。急がないと」

信号?蒼ざめた顔で、由美子は交差点の向こう側の歩行者用の信号を見た。信号は点滅して、他の同僚たちはもう横断歩道を渡り終えようとしている。

そうなのだ。あの異変が起こる前まで信号待ちをしていた。あれからいったい何分経ったというのだ。由美子は少なくともあの化け物に追われて虹色の忍者が現れ解決するまでは少なくとも三十分ほどの感覚はある。あれは幻だったというのか。

蒼い顔をしている由美子を心配するように増田が訊いた。

あれは夢だったのか・・・・。いや、やはりハンドバッグを手にしていなかった。現実以外の何ものでもない。

「気分でも悪いんですか?大丈夫ですか?」

信号は既に赤信号に変わっていた。

「ごめん・・・。ちょっと気分が悪いから帰るわ」

由美子は声をかけようとした増田の様子にも気にかけることなく、横断歩道と逆の道を引き返して行った。

目白通りを左に抜けて駒沢大学付近に見える風間由美子が住むマンションを訪ねるために車を走らせていた春日実は、ステアリングを片手に煙草に火をつけた。由美子の部屋は完全禁煙だ。今のうちに吸っておかないとまた部屋から追い出されるかもしれない。実は、何度も由美子の部屋に行っている。仕事の相談や、仕事の帰りに酔った由美子を送り届けたこともあった。何も用事がなくても何となく行ったことも多かった。また、由美子の方から用事もないのに呼び出したこともあった。だが、どこまでもそれだけの関係だ。実は、由美子の大学の先輩であると同時に編集社での先輩でもあったが、友人に過ぎなかった。それ以上の関係は由美子自身が望んでいない。実もまた、由美子にほのかな思いを抱きながらも由美子の気持ちを優先して、仕事のパートナーとしての存在にとどめていた。。

ここ数日編集社に姿を見せない由美子に実が電話を入れると、由美子は確かに部屋の中にいた。しかし、その返事も虚ろで何があっ

たのかも語ろうとしない。無言に近い通話状態が数分続いた後、突然由美子が言った。
「実君、レンタルビデオ屋のカード持ってる？」
由美子は実よりも年下であり大学の後輩でもあるが、友人付き合いが長いせいなのか、プライベートでは実をいつもそう呼んでいた。
「最近あまり使ってないが、一応まだ使えると思うけど」
「じゃあ・・・・。」
由美子はそこで一旦言葉を切った。そして、由美子が息を吸う音が聞こえてから
「ヒーロー物のビデオをありったけ借りて来てくれないかしら」
由美子は思い切って言いづらいことを言ったことが受話器越しにもわかった実は、淡々と言葉を返した。
「ヒーロー・・・・。たとえば、シュワルツネッガーとか？」
「・・・・」
その間、数秒沈黙が続いた。
「洋画じゃなくて・・・日本の・・・子供向けの・・・ウルトラマンとか仮面ライダーとか・・・そういうのが良いの」
今更ヒーローに目覚めたわけでもなかろう。その言葉を口に出す前に飲み込んでビデオ屋に向かっていた。車の中には、レンタル屋が貸し出す青い布袋の中に数枚のヒーロー物のＤＶＤが入っている。果たして由美子はこのＤＶＤを見て何をする気なのか。ある意味の期待感と不安感を抱いて、見えてきた由美子が暮らすマンションの駐車場に向かった。

実が部屋に入ると由美子はすでにビデオを見ていた。やはりヒーロー物だった。自分でも借りて来たのだろう。今由美子が喰らいつくように見ているヒーロー物は戦隊ヒーローだ。実が借りてきた物とは被ってはいない。
部屋に入った実に、由美子は「ありがとう」とひとことだけ言ってまた、ビデオを黙々と見ていた。

「いったい何があったんだ」
黙ってヒーローを見ている由美子がいたたまれなくなり、実は言葉を発した。どうせ、何も答えないかもしれない。電話の時と一緒だ。
すると、思いがけない言葉が由美子の口から突いて出た。
「ねえ、変だと思わない？」
たった今、実が訊いた内容の答えには直結していないだろう。それでも、まるで無視されるよりは良いかもしれない。そんな会話からでも、核心に触れることは可能だ。
「どういうことだ？」
実が訊ねた。
「これだけ、化け物が街を壊しているのよ。ましてやこの戦闘は化け物の体が巨大化するの。そうなるとレンジャー達も巨大なロボットに乗って戦う。お互いに殴ったり蹴飛ばしたりして転んで、ビルや街が粉々になる。本当なら、これだけでどれだけの被害が出ると思う？どれだけの死人が出ると思う？」
由美子の目は真剣だった。由美子の頭がおかしくなったとは到底思えないまま、その心意を確かめたく、次の言葉を待った。
しかし、由美子はそれからまたひたすらに画面を凝視している。
実は仕方なく、由美子を挑発した。
「ふうん。もしかして、これをヒントに災害のシュミレーションでもして、それを記事にしようっていうんだな。そういえば、またマグニチュード8クラスの関東大震災が近々起こるって言うしな」
由美子は画面から目を離さずに「フン」と鼻で笑った。
笑われても仕方が無いと実は思った。由美子がそんなことを考えているなどと、本気では思ってない。第一そんなシュミレーションは役に立たないし、そこからは何も生まれない。むしろ実が口走ったこの内容は、大人ながらに子供向けヒーローに夢中になり妙な疑問を抱く由美子とレベル的には違わないのだ。
しかし、実のその戯言も無駄にはならなかったようだ。

また由美子が口を開いた。
「そんなことを言ってるわけじゃないの。これだけの怪物が出て警察や自衛隊は何をしているの？世間はどうして騒がないの？それに・・・。」
「それに？」
「報道関係はどうして黙っているの？」
「これはドラマだろう。ドラマの中で矛盾を追求したらおもしろいドラマは何も出来なくなるし、矛盾があるからおもしろいと思うんだけどな」
由美子がふっと笑ったように見えた。そして、おもむろに右腕の袖を捲り上げた。
「見て」
腕は何か強い力につかまれたように真っ青に痣が残っていた。
「どうしたんだ・・・？誰かに襲われたのか」
「ええ。たった数秒の間にね」
ようやく、実のこの部屋を訪れた目的が果たされることになった。

実の腕を由美子がしがみつくようにつかんでいる。長年の友人付き合いの中で初めてのことだった。由美子は気丈な性格で必死に我慢をしているが、あきらかに体の芯が震えている。
今二人は、由美子が襲われた場所にいる。あの時、まるで異空間に入ってしまったような大きな交差点の前だ。夜というのに、今は普段通りに人々の交差が激しく往来していた。
実は由美子の身の上に起こった事件を一通りその口から聞き出した。完全に信じたかといえば自信がない。しかし、由美子の腕についていた青痣は何かを物語っている。由美子が遭遇したのは、化け物ではないかもしれない。通り魔的な人間に襲われ、あまりの恐ろしさに記憶を歪めてしまったという可能性も否定出来ないのだが、実際この場所に来て見ればこれだけの人間が歩いている。都会はいくら他人を顧みないと言っても、由美子がこれだけ脅える事件があ

った以上、何の騒ぎにもならなかったこと自体不可思議だ。
そのあらゆる疑問を解決するためにも、事件現場に戻る必要があった。それは、由美子から言い出したことでもあった。
横断歩道の前に立って何度信号が変わっただろうか。すでに何十分も二人の背後から行く人たちを見送り、道路の向こうから来る人たちを迎えている。
二人は再び信号が変わった頃に横断歩道を渡り始めた。
しばらく歩くと由美子が化け物から逃げながら入り込んだ暗い路地裏の入り口が見える。そういえば、幸い携帯電話や財布はスーツのポケットに入れて無事だったが、カバンを化け物に投げつけてしまった。
「そういえば・・・・カバン・・・・探さなければ」
「ここで失くしたのか」
「失くしたというよりは、自分から投げつけたんだけどね」
よく見ると由美子の震えは止まっていたようだ。カバンを探し出すという小さな目的に集中することがで、少しは気を紛らわすことが出来たのかもしれない。
しばらく歩いてその路地を抜けても目的の物はみつからなかった。またそこで交差点の人の流れをボーっと見つめるしかない二人だった。
「腹が減ったな」
実が突然そう言った。ただ黙って立っていながら、行き交う人々を観察しているだけでも、精神的に弱った由美子の体力を心配してのことだった。
二人の背後、舗道の片隅に屋台のラーメン屋が出ている。
「あそこでラーメンでも食って行こうか」
由美子は素直に頷いた。いつもの由美子ならば、取材のときは粘ることは何でもないその精神力がかなり萎えているのかもしれない。また、由美子自身がもっとも一刻も早くこの場所を離れたがっているのかもしれない。

実に促されるように、由美子の足もラーメン屋に向かって歩き始めた。

ラーメン屋台の中は3人の客でいっぱいだった。由美子と実は、ラーメンを注文してから仕方なく小脇に出ている小さなテーブルの前に腰を下ろした。

実は今来た交差点の方を眺めて由美子の証言を頭の中で整理していた。夜遅い時間でもこれだけの人が歩いている。由美子は何者かに襲われて逃げ回った。それを誰も目撃していない。それどころか由美子の視界には、”人間”は一人も存在しなかったのだ。由美子は襲撃者を獣のようだと言った。そして獣は由美子を仕留めようとした刹那に、救った者がいる。

虹色の男・・・いや、それが実際男かどうかは由美子でさえわかっていないのだが。

虹色の男が獣を倒した後、由美子は元いた交差点で襲われる前の行動をしていた。信号待ちだ。

実は胸ポケットから小型のデジタルカメラを取り出した。

「何を撮るの？」

由美子の質問に実はカメラを交差点に向けながら言った。

「あの信号を撮るんだよ」

「信号が何かあるの？」

「もしかして・・・だけど。信号の点滅とかが君に何かの暗示をかけたということも考えられるからね」

「暗示って？あれは暗示にかかった私の幻覚だと思ってるの？」

由美子は腕の袖をめくって実に突き出した。

「いや、すべてが幻覚じゃないかもしれない」

「どういうこと？」

「それがわからないから撮るのさ」

由美子がもっと反論をしてくると思っていた。それが当然だろう。気の強い彼女がそれだけの恐怖を味わいその証拠に腕に刺青のよう

に大きな青い痣が残っているのだから。しかし由美子は、ふと何かを考え始めたように一点をみつめていた。
「どうした？」
その時、由美子は何かを思いついたように屋台のおやじに声をかけた。
「おじさん、この辺で一番近い交番ってどこ？」
おやじは東の方を指さして言った。
「あの角のビルの陰にあるよ」
「ありがとう。ラーメンを食べたら行ってみよう」
「化け物に襲われたって、被害届けでも出すつもりか？」
言い終わって実は後悔をしたが、由美子はラーメンを口に入れながらふと考えた。
「受理してくれればそれでも良いんだけど、どうせ受理されるわけないし、カバンが届いてないか聞いてみるの」

復活（前書き）

霊能力者が作ったカウンセリング機関。果たしてそこは詐欺の集団なのか。報道記者の鴻池がそこに潜入をして見たものとは・・・。

復活

あの高校も一度くらい甲子園出場を果たしていたなら、統廃合で廃校になることもなかったかもしれない。最近では廃校になった学校の教室や職員室だった部屋を企業に貸し出しているところがあるとは聞いていた。そのほとんどはＩＴ企業が占めているという話も聞いたことはある。

テレビ局勤めとはいえ、ニュース記者を十年もしていながらその手のネタには今まで一度も触れていなかった。半分の五年は内戦が続く外国の特派員として激戦地と日本を何度も往復しながら働いてきた。そんな鴻池謙太郎にしてみれば、国内の学校の統廃合の話題は生ぬるいネタだった。まして、これから廃校に向かう理由は統廃合よりもどうでもいいネタだった。

日本屈指の霊能者に会って来いなどという指示は、中古とはいえベンツに乗れるようなお金を出してくれたニュースキャスターの柴本でなければこの俺を動かすことは出来ないと、鴻池は自負していた。

柴本は何故あんなネタにこだわるのだろう。ニュース原稿を書くときも世界中の暴動よりも7人の霊能者の存在を強調するように言われた。鴻池がこのネタに付き合うことで、柴本は多額の金をくれることを約束して、その一環として中古のベンツが買えるほどの小切手を切ってくれた。それだけ柴本はこの話題に執着をしていた。

あるとき鴻池が「どうしてそこまでこのネタにこだわるのか」と聞くと、柴本は「世界を救いたいだけだ」と真剣な目を向けて言っていたことが鴻池の脳裏に焼きついて離れないでいた。

これから会いに行く霊能者はニュースで伝えた7人の霊能者の中

には入ってはいない。しかし、柴本の話では有名ではない隠れた本物の霊能者だと言った。
廃校になった都立高校は都内とはいえ、思った以上に緑に囲まれた環境にある。鴻池はステアリングを切りながら、開放された門の中に滑らかに車を滑らせて行った。

旧校舎の玄関を入り、どこの学校も大して変わらない靴箱がずらりと並ぶ光景に、鴻池も懐かしさを感じてしばらくの間、佇んでいた。
よく見れば、下駄箱のひとつひとつに企業名が書かれた小さなラベルが貼ってあった。サイズはすべて同じくらいだが、デザインはその企業によって異なっている。
鴻池は、ラベルの企業名を眺めまわして目的の社名を探し始めた。
柴本は「東京シャーマンの磯上敏江を訪ねろ」と言った。
東京シャーマンは、若い頃に有名な霊能者としてテレビにも出演経験があった香野あずさがテレビ出演活動を引退した後に、自分の目で確かめて全国から確かに霊能力が認められる女性ばかりを集めて心霊カウンセリングを生業にして東京シャーマンを設立したと言われている。
どうせ、いかがわしい詐欺集団だろう。柴本はその実態をつかんで来いと言っているのかもしれない、と鴻池は勝手に自分に言い聞かせていた。
ほどなく下駄箱の上のラベルに「東京シャーマン」の文字を見つけた鴻池は、その数を数え始めた。7列と5段、三十五個の下駄箱がそこにあった。すべてがスタッフの数ではないかもしれない。おそらく来客の数もそこに入っているのだろう。
靴箱の中には、現在オフィスに来ていると思われるそれぞれの靴も入っていると同時に同じ模様のスリッパが入っている靴箱も多数あった。これを履いて入って来いというのか。鴻池は、自分の靴を脱ぎスリッパと交換をしてそれを履いた。

すると突然、そこにやって来た白い薄手のセーターを着た女に声をかけられた。
物静かな口調で「いらっしゃいませ」と言ったその女は、女というよりも”女の子”だった。もしかすると中学生くらいかもしれない。
「よく言われるんです」と女の子はクスッと笑って小さな声で言った。
鴻池は、自分が声を出した意識はまったくない。この子は自分の心を読んだというのか、と考えを巡らせて一つの結論に至った。
よく言われるということは、この女の子は想像よりもずっと年齢が上なのかもしれない。こんな風にひょっこり現れる。初めての客は自分と同じようにこの子を中学生くらいにしか見えない。そこで「よく言われるんです」と発言をすれば、まるで他人の心を読んだように思われるだろう。そんなサプライズで他人に信用を植え付ける詐欺集団、それが・・・。
「東京シャーマンの磯上敏江です」と絶妙なタイミングで言った。これもトリックか？
少し、はにかむように微笑んだこの子供が、目的の女なのかと思いじっとその澄んだ瞳を見つめている鴻池に対して、磯上敏江は冷静に「お待ちしてました、鴻池さん。どうぞこちらへ」と促した。
「あ、あの・・・・柴本さんから俺が来ることを聞いていたんですか？」
「はい。近々来るだろうから話を聞いてやって欲しいと仰ってましたので」
柴本はここの常連だったのか。どうりで、こんな地味な霊能力者の名前を知っていたわけだ。それよりも、近々来ると行っても今日この時間に来ることは誰にも知らせていない。もちろん、柴本も知らないはずだ。それに話を聞いてやってくれとは。インタビューをするのはこちらの方だ。そして、詐欺集団の実態を暴いてやる。
磯上敏江は玄関から早足で歩いて行く。鴻池は慌ててその後姿を追った。

敏江が入った部屋は玄関から歩いてすぐ近くにあった。
「もしかするとこの部屋は・・・・」
「職員室でした。給湯室も近くて便利なんですよ」
オフィスとなった元職員室はカフェのような型をとっていた。小さなテーブルがいくつも並び、テーブルごとの間に小さな仕切りが置かれていた。
鴻池は敏江に指示された椅子に腰をかけて「少々お待ち下さい」と言い残し、奥へ消えて行った。
3組の人間が二人ずつ向かい合って話しをしているのが見える。必ず一人にはコーヒーカップが置かれていて、一人には置かれていない。たぶん、そちらが東京シャーマンのカウンセラーなのだろう。カウンセラーの3人は二十代から三十代の静かな感じの女性たちだった。
思っていたよりも普通の光景だ。相談者の話に真剣に耳を傾けている思い思いの私服の女性。宗教的な姿を誇示しているわけでもなく、間に占いの道具のようなものも見当たらない。
しばらく様子を伺っていると目の前にコーヒーカップを持った敏江がやって来て、鴻池の前に置いた。
鴻池は、悪戯気分で敏江に尋ねてみた。
「俺が今何を考えていたかわかりますか？」
敏江はふと黙って鴻池を見つめた。
「いえ。わかりません」
からかっているのか、この女は・・・。しかし、考えてみればわからないのが普通だ。わかってしまうことに多少なりとも期待していたのかもしれない。こんな感じでここの相談者は毒されて洗脳されていくのだろうか。
「ここの収入源は相談者からの相談料だけですか？」
「たぶんそうだと思いますが、詳しいことは所長でなければわかりません」

「所長さんの香野あずささんは今、どこに」
「今日は九州の方に出張です」
「ここのバックに宗教団体がいるとか、そういうことは・・・。」
「ありませんけど・・・今日はそういうお話ではないですよね」
　確かにそうだ。柴本は7人の霊能力者が世間を騒がせているあのことについてもっと知りたがっているのだ。
「世界中の霊能者が言ったことで暴動が起きていること、知ってますか？」
「さあ、知りません」
　この子はニュースも見ないのだろうか。確かに霊能者云々を強調しているのはうちのテレビ局だけだが、ある噂で暴動が起きているのは事実なのだ。
「あの世とこの世が重なるとか何とか、そんな噂なんですが」
　敏江はキョトンとした可愛い目でちょっとだけ首を傾げて鴻池を見た。
　鴻池を無邪気に見つめる敏江の瞳は、本当に澄んでいた。そこから、ある思い出が走馬灯のように一瞬に駆け巡った。本当に一瞬な時間だったのだが、
「ありがとうございます」と、敏江はまた恥ずかしそうに小さくお辞儀をした。
　鴻池はあっけにとられて言葉が出なかった。そういえば、玄関で心を読まれたと思ったときも、この子に対して思ったことだった。この子は自分のことについて思われたことが読めるのか。
「でも、料理は上手くないですけどね」
　にっこり笑った敏江に、鴻池はドキリと敏江を見返した。一瞬のことで、鴻池自身も忘れてしまっていた、たった今思い出していたこと。瞳の綺麗な女は料理が上手いという、元妻を基準とした鴻池の勝手な思想だった。
「奥様は鴻池さんを全然恨んでなどいませんよ」
　取材、取材で、突然病気になって入院を余儀なくされた妻を見舞

うことすら出来なかった。むしろ、入院をしてくれていた方が取材に駆け回っても安心出来るとも思っていた冷酷な男だった。妻が手遅れだったということは、妻の妹から妻が死んだ後で知らされたくらいだ。その悲しみと妻を失った虚しさを埋めるように、鴻池はますます激戦地での取材を希望して走り回った。

「内戦の多い国でこれまで無事だったのは、奥様が守って下さっていたんですよ」

静かに言う敏江の言葉は真実を感じさせた。

今までの鴻池ならば、どこでそんなことを調べたのかと、訝しがるだろう。しかし、そんなことも疑わせないものがそこにあった。

「お守り袋の中に奥様の結婚指輪を入れて持ち歩いていることにすごく感謝しているみたいです。だから、尚更鴻池さんを守りやすかったのですね」

お守り袋の中の結婚指輪のことは、柴本さえにも言っていない。いわば鴻池だけの秘密だった。この子はどうしてそこまでわかるのだろうか。事前に調べるならば、徹底した身体調査までも必要になってくるほどに、肌身離さず持っているものだった。

猜疑心以上に、この子の言葉を信じる方向へ心が揺らぐのを隠しきれなかった。必死な抵抗もむなしく、自然と涙が出た。男は人前では泣くものではないと決めていたのだが、鴻池はやっと言葉を絞り出した。

「柴本さんも意地悪だな・・・・」

ここへ自分を来させた柴本の真意がわかった。

柴本は鴻池を入社当時から可愛がってくれていた。よく酒にも付き合わされ、まだ若かった鴻池の相談にも乗り、妻が死んだ時にもいの一番に慰めてくれて鴻池のその後を心配してくれた人だ。今回の取材の目的は7人の霊能者のことでも、暴動のことでもなかった。ただ、霊能者云々よりも、癒しを与えてくれるこの目の前にいる女の子に会わせたかっただけなのだろうか。

それから1時間ほど鴻池は心の中に引っかかっていた妻に対して

の後悔の念を語り、その度に妻の愛情を確認させられて自分が次第に癒されていくことを感じていた。
「何だかスッキリしたような気がします」
鴻池は心からの言葉を発していた。
「カウンセリング料をお支払いしなければいけませんね」と冗談めかして言ったつもりだが、場合によっては本気で払うことも惜しいとは思わないまでになっている自分に驚いていた。
「今回は結構です。サービスしておきます」
敏江が悪戯っぽく微笑んだ。この物静かそうな子もこんな冗談を言うときもあるのか。一見すれば本当に普通の女の子だ。見方によっては普通の中学生だ。そう思った途端「あっ」と息を呑んだ。また読まれただろうか。
「こう見えてもわたしは、二十歳なんです」
そう言いながら笑っている敏江に、鴻池は柴本が言った日本屈指の霊能者という言葉にも正当性を否定できないでいた。
「今日はこれで帰ります」
お辞儀をして立ち上がり部屋を出ようとした鴻池の背後に、敏江が声をかけた。
「空と大地がひとつになります。そんなイメージがよく浮かんでました」
鴻池が振り返ると、敏江は真剣な目で更に続けた。
「空と大地を結ぶ線は縦の直線。そこに地平線を表す横の線が加われば、それはクロスになります」
確かに十の字が出来上がる。
「復活します。何かとてつもないモノとそれに反するもうひとつのとてつもないモノが」
「正義と悪とか、そんなことですか？」
鴻池の質問に、敏江はわからないとばかりに小さく首を振った。
鴻池は、初めて敏江の前でふと笑いを漏らした。
「ありがとう。それだけわかれば充分です。また、来て良いですか

？今度は相談者として」
「ただ、お茶飲み程度に遊びに来て下さっても結構ですよ。お待ちしています」
敏江は深々と頭を下げた。

元校庭だった場所の駐車場には夕日が落ちかけて、正面の西日が眩しかった。
世の中には科学では言い表せない不思議なこともあるものだ。こんな小さな元学校の中にも起きている。世界には理解不能な現象も数多くあることが当然のように感じられた。このネタは柴本に頼まれなくても自分が追い詰めて解明してみたい、そんな気持ちになっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3656z/

パラドクサー

2011年12月18日09時49分発行